

双葉通信【第 210 回】（被災地に行くNo.15）“ふくしまの切り捨ては許さない”

20240510 上田 勉

福島第 1 原発事故 公営の伝承施設に先駆け 5 年余 富岡「ふたばいんふお」閉館へ復興の歩み、当事者目線で

「東京電力福島第 1 原発事故で被災した双葉郡 8 町村の復興への歩みや現状を発信してきた民間施設「ふたばいんふお」（富岡町）が 3 月 30 日に閉館する。来館者数が新型コロナウイルスの感染拡大を機に減った一方、近隣では公営の伝承施設の整備が進み、一定の役割を終えた。資料の一部は公営施設への寄贈を検討しており、施設を運営する住民団体「双葉郡未来会議」代表の平山勉さん（57）は「これからも双葉郡を温かく見守ってほしい」と話している。【尾崎修二】

ふたばいんふおは 2018 年 11 月、国道 6 号沿いにオープンした。富岡町中心部の避難指示解除から約 1 年半で、隣の大熊、双葉両町は住民ゼロの頃だった。開館に当たっては「当事者目線で集めた情報を見て知ってもらい、双葉郡の住民同士や地域外から訪れた人がつながれる場所にしたい」との願いを込めた。約 150 平方メートルの室内に写真入りパネルや立体地図を展示し、書籍や特産品、ご当地グッズを販売。大小さまざまなイベント告知のチラシや住民らが制作した冊子も置かれ、ワークショップや交流会の会場にもなった。

国や東北の被災 4 県でつくる「震災伝承ネットワーク協議会」が登録する震災伝承施設に、福島県内の民間施設として唯一認定されている。

来館者は年間 4000～6000 人ほど。平山さんによると、開館から増加していた客足は新型コロナを機に減少し、団体客が少なくなった影響で今もコロナ前の水準に戻っていないという。一方、郡内には 20～21 年、「東日本大震災・原子力災害伝承館」（双葉町）、「とみおかアーカイブ・ミュージアム」（富岡町）、「震災遺構 浪江町立請戸小学校」と公営の伝承関連の施設が相次いで整備され、震災を学ぼうとする人たちが流れるようになった。

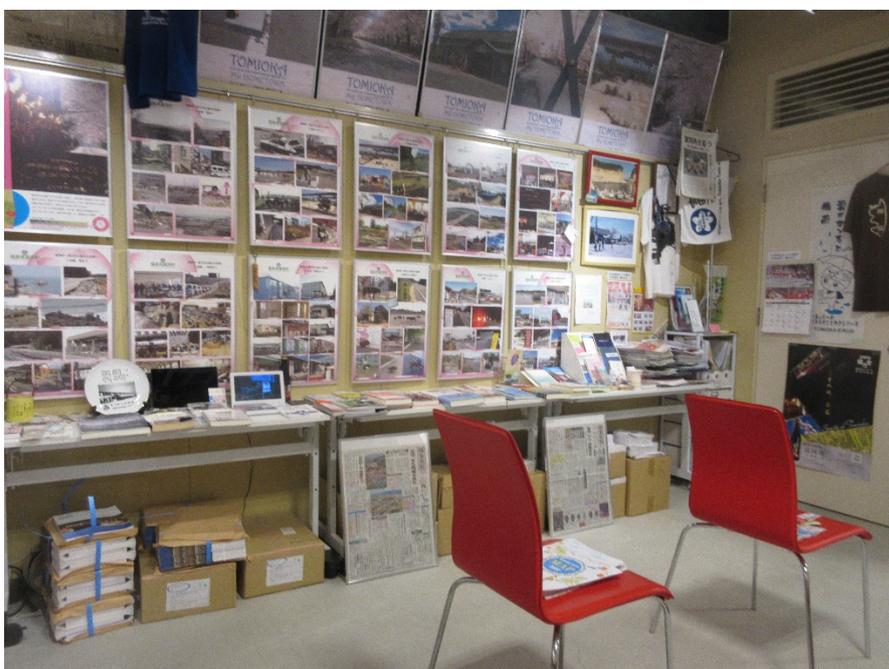
人件費や同名の情報冊子「ふたばいんふお」の印刷代などは復興庁の補助金を活用してきたが、部屋は平山さんが代表を務める地元のホテル経営会社が無償提供する形を取ってきた。今後の会社の経営面を踏まえ、施設を閉め、空いたテナントを業者などに貸し出すことに決めたという。自身は 24 日に投開票された町議選で初当選し、新たな立場で故郷の再生に携わる。全町避難中に平山さんが歩道橋に掲げた「富岡は負けん！」の初代横断幕のほか、川内村のマラソン大会の T シャツ、大熊町のマスコット入り起き上がり小法師（こぼし）など、住民が地域を取り戻そうとしてきた歩みが伝わる資料も展示されてきた。横断幕は、とみおかアーカイブ・ミュージアム開館時に寄贈済みで、残る資料も同ミュージアムや伝承館に寄贈するか、手元で一時保管するという。

震災後、浜通り地域で対話の場を企画する団体の副代表、霜村真康さん（48）＝いわき市＝は「解除から間もなく人が少ない頃から民間で拠点を作り、地域の小さな明るい話題も含め発信してくれた。常駐スタッフもいて、気軽に立ち寄り話ができる貴重な場だった」と感謝する。情報冊子も 1 月発行の 7 巻目で最終号となった。双葉郡未来会議は今後も存続し、

住民インタビューや、避難指示解除前から撮りためてきた各地の写真は、同会議のウェブサイトで引き続き公開する。」（「毎日新聞」2024年3月27日付け）



【ふたばいんふおの内部（富岡町）】（2024年3月28日撮影）



【双葉郡8町村の展示や資料が並ぶ（ふたばいんふお）】（2024年3月28日撮影）